宗教新聞

発行所 宗教新聞社
東京都新宿区新宿5-13-2
〒160-0022
電話 03-3353-2940(代)
FAX 03-5363-5182
郵便振替口座 00130-9-22704
URL http://www.religion-news.net
©宗教新聞社 2021
購読料(税込)
1部 500円
半年 3,000円（〒共）
年間 6,000円（〒共）

〈社是〉
一、精神革命の旗手
一、宗教連合の具現
一、地上天国の建設

東日本大震災追悼・復興祈願祭
10年の節目、祈りを被災地へ
鶴岡八幡宮

鎌倉宗教者会議主催（会長＝吉田茂穂鶴岡八幡宮宮司）の東日本大震災追悼・復興祈願祭が3月11日、鶴岡八幡宮で執り行われた。今年は緊急事態宣言の中、新型肺炎の感染拡大防止のため関係者のみで開催し、インスタグラムでの生配信などを通して、それぞれの場所で祈りが捧げられた。

「仏教の祈り」を捧げる臨済宗円覚寺派管長の横田南嶺老師

同追悼・復興祈願祭は東日本大震災の1か月後に鶴岡八幡宮で行われて以来、11回目。鎌倉の神職、僧侶、司祭、牧師が心を一つにして震災の犠牲者を哀悼し、被災者に思いを寄せて祈りを捧げる。今年は神道30名、仏教30名、キリスト教10名が参加した。

午後2時40分、奉仕する宗教者一同が雅楽と共に舞殿まで参進した。舞殿に昇殿した後、地震発生時刻の午後2時46分に鐘の音と共に全員で1分間の黙祷。一切の音が消え静寂になった。

最初に鶴岡八幡宮をはじめ鎌倉の神社の神職30名による「神道の祈り」が捧げられた。修祓の儀が執り行われ、神職と参列者全員が共に大祓詞を斉唱した後、宮司一拝、献饌。

斎主・吉田茂穂鶴岡八幡宮宮司が祝詞を奏上し、「東日本大震災で損害を受けた郷々の復興を、鎌倉仏教界ならびに鎌倉キリスト諸教会の主なる人々、集った人々と心を合わせ、10年の節目に合わせ祈願する。今も不自由な暮らしをしている人々が身も心も導かれ、復興の業に携わる人々が心を合わせ、苦難を乗り越え、心強くなり、日本が静まり守られるように心から祈りを捧げる。神仏の分け隔てなく一つの心で、世界に広がる新型コロナウイルスを一日も早く払い退けることを祈願する」と、大震災に見舞われた郷土に住み続ける人々に深く心を寄せ、心の安らぎと静まりを願い、一日も早い復興と新型コロナウイルスの終息を大神様に祈念した。

次に「仏教の祈り」が導師の臨済宗円覚寺派管長・横田南嶺老師と鎌倉市仏教会30名の僧侶により執り行われた。導師が法要に込められた思いを読み上げる「香語（こうご）」を奉読した後、僧侶と参列者全員が観音経を読経した。導師と共に参列者全員が「願わくばこの功徳を以て、普（あまね）く一切に及ぼし、我ら衆生と皆共に仏道を成ぜんことを」と「ご回向」を唱和し、真摯な祈りを被災地に送った。

次に鎌倉市内キリスト教諸教会（カトリック教会、日本基督教団、日本聖公会、日本キリスト教会）の司祭、牧師による「キリスト教の祈り」が捧げられた。カトリック雪の下教会・古川勉主任司祭が始めの祈りを捧げ、日本聖公会・鎌倉聖ミカエル教会の北澤洋司祭とカトリック大船教会のマルコ・ターディフ主任司祭が聖書を朗読し、日本基督教団大船教会の松下道成牧師が祈りを捧げた。

「世界は試練と困難に直面している。東日本大震災から10年、この10年をわかったように語ることはできない。10年苦しみ続けている人がいる。我々の想像を絶する苦しみと絶望の中で、聖書のヨブは嘆き、神に叫び続ける。永遠に続くかと思える沈黙。あなたが意識しなくても、神はあなたのすぐそばにおられる。共に祈ることが私たちを一つに結ぶことを知っている」

「キリスト教の祈り」を捧げるカトリック雪の下教会の古川勉主任司祭

カトリック雪の下教会古川勉主任司祭が主の祈りを、日本聖公会鎌倉聖ミカエル教会の北澤洋司祭が結びの祈りを捧げた。

社説

コロナ禍の戒律とは

片手に算盤、片手に十善法語

「鑑真和上と戒律のあゆみ」展の図録の最後に、江戸時代中期、大坂商人の間で「片手に算盤、片手に十善法語」と称された慈雲尊者の紹介があった。福沢諭吉の「論語と算盤」ほど知られてはいないが、日本資本主義の倫理を形成した思想としては、より重要であろう。

折よく、NHKラジオ第2放送「宗教の時間」で昨年10月から今年3月まで、小金丸黙仙師による「慈雲尊者の仏法　この世のまことを生きる」があった。「尊者」とは釈尊の身近な弟子に対する尊称で、戒律の希求は釈尊への原点回帰運動であったことからも、同展の末尾を飾るにふさわしい僧のように思う。その意味で、今も戒律は求められている。

万葉学者の上野誠奈良大学教授は、近著の『万葉集講義』（中公新書）で「漢字も、儒教も、仏教も、律令も、この国に入ると、みんなグダグダになって、日本化してしまう」「外側からやってきた文化を受け入れて、やがて彼我の差をなくしてしまうのが、日本文化の特性だ」と述べている。「鑑真和上と戒律のあゆみ」展でもそのことがよく理解できた。では、なぜそうなったのか。

小金丸師は「宗教の時間」のテキストで、「仏の深い境地を人間社会の現実から離れた理想郷のように思う人もあり、また、真実と現実が対極のものであるかのように考える人もありますが、現実と真実を分けないで、現実の中にこそ真実を見出すべきであって、現実を捨てて真実を求めることは宗教ではありません。また、自己の外に真理を見つけることも意味がありません。矛盾していると思える現実の中に真実があるからです」と述べている。仏教受容に際し、聖徳太子が在家の経を選び『三経義疏』を著した時代から、その傾向は今に続いている。

ロシア革命の「ナロードニキ（人民のもとへ）」ではないが、常に大衆を意識し、発展してきたのが日本の仏教であり宗教・思想である。背景には、縄文時代の狩猟採取、弥生時代の稲作によって培われてきた「平等に働く」という日本社会のあり方がある。古代から日本の男女は対等に働いてきたのである。ことさら西洋から指摘されることではない。

もっとも大衆志向は、常に堕落の危険を宿している。そのため、時代の節目節目に釈迦に返れ、インド・中国に返れの原点回帰運動が、自然発生的に起こってきた。上野教授によると、万葉集も中国の漢字文化への回帰と捉えないと本質は理解できないという。それこそが、日本文化のレジリエンスであろう。そのためには国境も軽々と超える。もともと偏狭なナショナリズムなどそぐわないのである。

「戒律あゆみ」展を見ながら、コロナ禍の戒律とは何か考えてみた。その一つはマスク。スーパーコンピュータでマスクの感染防止効果を実証したのは、いかにも科学技術の時代。煩わしく感じていたのを反省し、これからはファッションとして楽しもうと思う。

いい点はリモートワーク。モニターでの会話で、情報にプラス感情を交換するノウハウが蓄積されている。時には、面と向かって話す以上に効果的なこともある。

何より自分の生活圏で過ごす時間が増えたのはありがたい。地域のために思う存分働くことができるようになった。振り返ってみると、コロナ禍は日本いや世界の大きな転換点になったと言える日が来るだろう。

慈雲尊者の言葉に「人は人となるべし、この人となり得て、神ともなり仏ともなる」がある。小金丸師は「釈尊も人として生まれ、そして人として仏となられたのです。人の道を忘れて仏の道を進むことはできません。つまり、人としての行いを全うして仏となるのです。この条理を明らかにした代表的名著が『十善法語』なのです」と解説する。

原恩主義の日本的宗教

上野教授は、日本人の心性を「原恩主義」とし、一神教の「原罪主義」と対照している。今ある自然、自分、地域を、災害も含めて大いなるものからの恩と受け止め、そこで生かされる自分として誠を尽くすのが日本人の生き方であった。災害も共同体の罪と感じ、それを祓う修行を自分に課すのが日本的宗教の原点にある。そんな日本人の原点に回帰し、新しい時代の倫理を求めたい。

神道国際学会主催の国際神道セミナー
「宗教と伝染病」について再論

特定非営利法人神道国際学会の主題で、第25回国際神道セミナー「神々と伝染病Ⅱ」が3月9日、関西大学東京センター（東京都千代田区）で開催された。首都圏での緊急事態宣言延長がなされる中、前回と同じテーマで、日本の伝統的な宗教と疫病とのかかわりやコロナパンデミックが宗教界に及ぼした影響などについて、3人の研究者が発表し討議が行われた。

三宅善信同学会理事長は開会挨拶で、これまで幾度か伝染病の蔓延と大震災被害が関連して起こってきたわが国の歴史に触れながら、セミナーの趣旨を説明し発表者を紹介した。また、10年目を迎えた東日本大震災の犠牲者に追悼の意を込めて一同で黙祷を捧げた。

最初に東京大学大学院人文社会学系研究科の西村明准教授が「衛生と信仰のはざまで―近代日本宗教史に学ぶ―」と題し講演。モデレータは東京工業大学の弓山達也教授。

宗教民俗学が専門の西村准教授は、佐賀県唐津にある増田神社の信仰実践に焦点を当てて、民間信仰と衛生観念を考察した。

日清戦争終結後、帰還兵を通してコレラが流行し、唐津市大串でも多数の患者が出た。衛生知識を持つ増田敬太郎巡査が同地に赴任し、不眠不休で対策に努めたが、彼もコレラに感染し、「高串のコレラは私が背負っていきますからご安心ください」と言い残して3日後に死亡。コレラが終息して1年後、住民は感謝と敬意を表して神社を建立、「巡査大明神」として祀り、増田神社は疫病の守り神となった。大正期には警察関係者の注目を集め「警察神」として顕彰され、戦後は人類愛の権化として再評価されるようになる。

西村准教授は、昭和41年に開かれた地元住民と増田巡査の出身地熊本の人たちとの座談会資料に注目。熊本県の医師内田守氏による『巡査大明神全傳』に収められた、座談会の発言を例にとり、純粋な信仰の住民の立場と、迷信や民間信仰と衛生を切り離そうという立場とがあるのを見出す。この相克を、近代日本宗教史における「民間信仰」の概念の変遷を通して、どう位置付けるかに論及した。

伝統的組織宗教が近代化を模索する中で、民間信仰を非合理的な迷信として排するのではなく、民心を統括的に教化するエネルギーとして肯定的に摂取すべきではないか、とまとめた。

次に、大正大学地域構想研究所・BSR推進センター主幹研究員で東京医科歯科大学非常勤講師の小川有閑氏が、同センターが昨年5月、12月に実施した寺院向けWEB調査の結果を踏まえ『コロナ禍が寺院にもたらす影響』について発表。葬儀の実施状況や法要に関する相談状況、寺院でのイベントの開催、法務や寺院経営に対する不安、コロナ禍の状況をどうとらえているか、など総合的なアンケートを収集し①全国と東京②首都圏と関西圏で比較考察をした。その結果、葬儀、法事の規模縮小は全国的だが東京は簡素化が顕著。オンライン化が進む中で、檀信徒への「お便り」など紙媒体の価値が再発見された。対面が困難な中でこそ菩提寺からコミュニケーションを図ることの重要性が再確認された。小川氏は、コロナ禍にかかわらず、各寺院の真摯な取り組みが重要だと結論づけた。

三番目に東北大学総長特命教授で日本民族学会前会長の鈴木岩弓氏が『流行病の宗教民俗』について宗教民俗学の立場から講演。鈴木氏は、広く一般の人々が信じているカミと人との関係から、流行病にかかわるカミの研究を発表。①流行病を起こすカミ（疫病神、病魔など）と②流行病を阻止するカミ（鍾馗、スサノウなど）に分かれる、とまとめた。

講演の後、オンラインでのコメントとパネルディスカッションと続き、同学会常任理事の芳村正徳・教派神道連合会理事長、神習教教主の挨拶で閉会した。

３人の講演者によるパネルディスカッション＝3月9日、東京・千代田区の会場

天地

天地子の暮らす里山に、タケノコの季節がやってきた。竹やぶに入ると、今年はイノシシが掘り返した跡が見られない。かなり捕獲に力を注いできたので、数が減ったのだろう。例年だと、イノシシが食べ荒らし、食べ飽きた後、人間の口に入るタケノコが、今年は最初から掘られるを待っていた▼食卓にタケノコの天ぷらが盛られたのを見て息子が、「今年もタケノコ地獄が始まる」とつぶやいた。思わず、「地獄ではない、天国だ」と反論する。地獄はタケノコ掘り、天国は食卓、さしずめ煉獄は大釜でのタケノコゆでか。地獄の釜ゆでの刑ではない▼大量のタケノコに備え、今年は大釜を二つそろえた。夜明けと同時にタケノコを掘り、一輪車で運んで、ぬかを入れた大釜に入れる。ドラム缶を半分に切ったかまどに、廃材をくべて、1時間。後は冷めるのを待ちながら、別の仕事▼昼過ぎに、大釜の前に陣取り、タケノコを取り出しては出刃包丁で切り、皮をむく。タケノコの香りに包まれる至福のひとときである▼次の問題は配り先。最初は「ありがとう」と歓迎されるのだが、次第に「もういらない」に変わる。そこで、身近な人から遠くの人へ、それも都会へと配り先を変える。資本主義社会における流通の問題である。流通は価値を生まないと言っていた▼最後は、どう料理するか。レバートリーが今一つの妻を「のびしろさん」とおだて、レシピを調べ奮起を促しているのだが…。

灯

「さて八日の後、弟子たちはまた家の中におり、トマスも一緒にいた。戸にはみな鍵がかけてあったのに、イエスが来て真ん中に立ち、『あなたがたに平和があるように』と言われた。それから、トマスに言われた。『あなたの指をここに当てて、わたしの手を見なさい。また、あなたの手を伸ばし、わたしのわき腹に入れなさい。信じない者ではなく、信じる者になりなさい。』トマスは答えて、『わたしの主、私の神よ』と言った。

イエスはトマスに言われた。『わたしを見たから信じたのか。見ないのに信じる人は、幸いである。』」（ヨハネによる福音書20・26―29）

西洋キリスト教の暦では今年4月4日が復活祭（イースター）。その後、聖霊降臨の主日までの七週間を復活節として祝う。弟子たちは主の復活を体験し、彼こそキリストであると証言する。

ユダヤ教の祝祭日とも重なる春の祭り。草木が芽吹き、花咲く大自然の躍動の中に、聖霊の息吹を感じる。かつても今もこれからも創造主は生きておられる。見えない神の見えるしるしを感じ取っていきたいものだ。（1）

本紙定期購読のお申し込みは
■ご希望購読期間 ■氏名 ■郵便番号 ■住所 ■連絡先電話番号 ■メールアドレス（お持ちの場合）を明記の上、宗教新聞社宛、はがき、FAXまたはEメールで左記へお申し込みください。
宗教新聞社
〒一六〇―〇〇二二
東京都新宿区新宿5―13―2―4F
電話 03（3353）2940
FAX 03（5363）5182
e-mailreligion@sage.ocn.ne.jp
http://www.religion-news.net
※購読料 年間6000円（税・郵送料を含む）

縄文のパワーフィールドへ
神道よ！今こそ《古来の本物の道》に戻るのだ！
奈良泰秀
エハン・デラヴィ 著
本物のシャーマニズムを日本人が忘れている。神道の潜在力を思い出し、世界に伝えていこう。ケルト民族末裔の意識研究家が、神道のエッセンスを聞き出す。チャネラー、ヒーラー、コンタクティを超える、宇宙と直接つながる知恵は、ここ日本の神道にあり！
四六上製1785円(税込)
株式会社ヒカルランド
〒162−0821 東京都新宿区津久戸町3-11
電話：03-6265-0852 FAX：03-6265-0853
http://www.hikaruland.co.jp

日本宗教の闇
室生 忠 著 四六判・520頁 定価：本体2,000円＋税
拉致監禁による強制棄教との戦い
信教の自由が保障された今の日本で、強制棄教を目的に拉致監禁が行われている。職業的強制改宗屋が家族を巻き込み、信者を拉致し、部屋に監禁して、脅迫的説得により棄教を迫る。特に世界平和統一家庭連合（統一教会）やエホバの証人の信者に被害者が多く、中には12年以上の監禁された人もいる。驚くべき宗教迫害のリポート。
アートヴィレッジ
受注センター
〒657-0846 神戸市灘区岩屋北町3-3-18・4F
TEL078（882）9305 FAX078（801）0006

日本よ、蘇れ
日本神話の知恵
ゆがんだ歴史観、家庭の崩壊、教育の危機……。いま日本は大きな危機に瀕しています。この現状を打破するカギは、実は「日本神話＝古事記・神代一」にあるのです。日本神話に満ちあふれる、愛と生命と知恵に立ち返ってこそ、日本の未来は拓けます。あなたも著者といっしょに、「神話の教え」をひもといてみませんか？
出雲井晶 著
●定価1000円（税込み）
●四六並製 232ページ
●発行・産経新聞社／発売・扶桑社
お問合せ先／扶桑社 販売企画部
〒105-8070 東京都港区海岸1-15-1
TEL03-5403-8859
購入申込み FAX:03-3578-3075

日本国始め 饒速日大神の東遷
須佐之男尊の出雲国創建後、饒速日尊が32従者と25軍団を従え、九州から大和に東遷して總向の地に大和国を建国。その時、饒速日尊が配下を募り配置した今も残るその出自と足跡を立証する。
大野七三 著
批評社
〒113-0033 東京都文京区本郷1-28-36 鳳明ビル102A
TEL 03-3813-6344 Fax 03-3813-8990

『先代旧事本紀』の神髄を極めた著者が語る。足で調べた大和建国の謎。
（定価：本体2000円＋税）

自由社ブックレット2
理想の政教分離規定と憲法改正
四六判87頁／本体価格500円
杉原 誠四郎 著
憲法改正を見据えたとき、宗教に関する条項、規定は、真剣に考えねばならない問題である。
自由社
〒112-0005 東京都文京区水道2-6-3
Tel03-5981-9170 Fax03-5981-9171
http://www.jiyuusha.jp/

人生の苦しみに積極的な意味はあるのか？
『21世紀に生きる日本人のための浄土思想』の出版を記念して、平成26年3月から28年11月までの5回にわたる講演をまとめた著者渾身の生命の書。
新刊！
私の生命（いのち）の復活
上橋 泉 著
四六判296頁（本体1500円＋税）
日本人の宗教性（霊性）は回復するか？
株式会社 如月出版 販売部
〒152-0023 東京都目黒区八雲2-24-15 ラ リュミエール1F
TEL 03-6657-9000 Fax 03-6657-8999
http://www.kisaragibook.com

たま出版
www.tamabook.com
魔のJR中央線
自殺霊の撮影で判明したこと
齋藤 齋靈 著
四六判158頁 定価1,365円（税込）
十年の歳月をかけ、ついに自殺者の霊の撮影に成功。霊能者が書いた自殺防止の書。死んでも痛みは残るもの、自殺者の言い分、〝こんな苦しみ〟から救われるために、自殺をした状態で霊はさまよう、硫化水素自殺、政治家と自殺、自殺の多いJR中央線の謎を解く！
アシレス出版部発行
お近くの書店にない場合は下記へ 送料210円
〒229-0002 相模原市渕野辺2-17-14
TEL042（751）2558 FAX042（754）1818

山喜房佛書林
補陀洛信仰の研究
神野富一 著 A五判 五八〇頁 本体一六、〇〇〇円
チベット・アジア各地の補陀洛信仰とその伝播ルート等の集大成
弘法大師聖句集成
福田亮成編 B六判 二九〇頁 本体五、八〇〇円
本書は大師の言葉が読者の心に直接届くよう工夫され、掲示伝道や寺報の種子に最適。
〒113-0033 東京都文京区本郷5-28-5
TEL：03-3811-5361 FAX：03-3815-5554